

共同利用・共同研究課題「『失敗』のフィールド言語学」(jrp000285) 2024 年度第 1 回研究会 (通算第 3 回目)

日時：2024 年 6 月 1 日 (土) 13:00-17:30

場所：アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 304 マルチメディア会議室+オンライン

本共同研究課題の通算 3 回目となる今研究会では、2 件の報告を通じ、言語学のフィールドワークにおける過去の失敗事例についての情報共有をおこない、それにもとづき討論した。当日報告は以下のものである。

木本幸憲 (AA 研共同研究員, 兵庫県立大学) 「フィリピンの狩猟採集民の言語研究での失敗と後悔：調査地選びからキャリア形成までを振り返る」

千田俊太郎 (AA 研共同研究員, 京都大学) 「フィールド言語学と規範言語学」

なお、当初呉人恵氏 (AA 研共同研究員, 北海道立北方民族博物館) も報告を予定していたが、体調不良により欠席となった。

研究会は AA 研 304 マルチメディア会議室での対面およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。前回同様、はじめに代表者の山越が趣旨説明をおこなったのち個別事例の報告をおこなった。報告のなかにはこれまで通りプライベートな問題に立ち入った内容のものもあったため、本報告書においても差し支えの無い範囲で概要を述べる。

第一報告者の木本は、フィリピン・ルソン島におけるアルタ語を対象としたフィールドワークについて、フィールドワークに向かう経緯についての説明と、フィールドに入ってから体験した事象について報告したうえで、各フェーズで問題となる点について紹介した。対象地域・言語の選定にあたっては研究者の助言を得ておこなったが、対象言語の危機度が深刻なため言語コンサルタントを探すことが困難であること、日本の、研究者の感覚で調査を実施しようとしてもコンサルタントはノマドとしての生活を送っており、「予定」通りにこなすことは困難であること、謝礼に関してはいまだに何が最適な対応であるのかわからない状況にあること、など自身の調査経験から具体的な問題が報告された。それらの経験をふまえ、とくに調査地の選定は慎重に行う必要があるということ、さらに「合わない」場合は撤退する勇気を持つことも必要であるという重要な提言がなされた。

第二報告者の千田は、録音媒体の劣化・故障や調査写真ファイルの紛失といったデータ保存に関連する失敗、ドム語の“coverb”にかかわる構成素順の記述の困難さといった具体的な経験に加え、フィールド言語学において調査しようとしているのは話者の規範意識が反映された「理想的な」言語ではないか、記述的であるべきだという前提の中、そういった規範的言語を探そうとしているのではないかという問題提起があった。この問題提起に関し

では、こうした規範意識が出てしまうのはコントロールできないことであり、必要なのは調査する側が記述的態度で臨むことだという意見が参加者から出された。このほか、調査者がコミュニティに入ることによって生じるコミュニティ内の人間関係の変化という問題についても、個別の事例をもとに紹介された。

以上2名の報告ののち、次回以降の研究会について相談した。

(文責：山越康裕)

※当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.